

**Keyword**

「学校・保護者との緊密な連携」「教育相談・学習支援の充実」

《 概要 》

小学校第3学年に在籍する該当児童は第2学年の1学期から不登校になった。7月に教育相談を行い適応指導教室への通級を開始した。当初は母親から離れるのを嫌がるため、母親が見守る中で過ごしていたが、2学期から一人で過ごせるようになった。

学習面では算数の計算問題は得意だが、手先を使う作業や文字を丁寧に書くことを苦手になっている。また、体を動かすことが好きで、休憩時間にはサッカーやドッジボール等を好んで行っている。

第2学年の3学期頃から学校の通級指導教室にも定期的に通うようになり、第3学年の1学期前半までは順調に学校と適応指導教室に通っていたが、第3学年の運動会をきっかけに学校及び適応指導教室に通うことができなくなった。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

4月

- 保護者懇談
- 学校訪問

4月～9月

- 学習支援
- 体験活動

9月～11月

- 学校訪問
- 保護者との連携

相談・支援等の状況

- 保護者懇談  
4月当初に保護者と懇談を行い、学校への復帰に向け、学習支援と社会性を身に付けさせることを重点的に支援していくことを確認した。
- 学校との連携  
毎月2回、学校と連絡を取り、当該児童の適応指導教室での様子を知らせるとともに、通級指導教室での様子について情報交換を行っている。
- 学習支援  
学習指導は個別指導を中心に行い、当該児童の状況に応じた学習内容の支援を行っている。  
学習する内容を当該児童に決めさせるなど、適応指導教室での1日のスケジュールを本人が管理することで主体性の育成を図っている。  
第2学年時は国語科と算数科を中心に学習を進めていたが、第3学年になった今年度は社会科・理科・外国語科の学習も行っている。
- 体験活動  
カヌー体験、お菓子づくり、施設見学等の様々な体験活動を定期的に行い支援専門員以外の人と関わることで社会性の向上を図っている。
- 学校訪問  
4月と9月に学校訪問を行い、当該児童の現状、保護者の思い、今後の支援の在り方について共有した。
- 保護者との連携  
他の通級生の誘いに応じて11月の下旬から再び通級するようになったので、今後も保護者と緊密に連絡を取り合い、継続的な通級につなげる。

《 本事例の留意点 》

- 当該児童に、学習する教科やレクリエーションの活動内容を決定させ、適応指導教室での意欲化を図っている。
- 当該児童は、学習能力が高く、**個別指導を中心とした学習支援の充実**により、学習面では着実に力を伸ばしている。また、気持ちの面では他の通級生に気遣いができるようになるとともに、我慢することもできるようになるなどの変容が見られた。
- ケーキづくり、カヌー体験、施設見学等の様々な体験活動を通して社会性が育ってきた。今後も、**学校・保護者との緊密な連携**を通して継続的に通級するための手立てを模索し、より一層の連携を図ることで学校復帰につなげていきたい。

**Keyword**

「Step up &amp; Step out」

## 《 概要 》

- 不登校児童生徒の状況  
芦別市では適応指導教室を「ステップ・クラブ」と称している。現在、100日以上登校していない児童生徒は6名いるが、4月時点での「ステップ・クラブ」の在籍児童生徒数は2名であった。その内1名は学校へ復帰している。また、2名が体験入級しているが、通級するための交通機関の確保等が課題になっている。
- 教室開設の趣旨と業務  
不登校により家庭に閉じこもりがちな児童生徒に対し、学校生活への復帰を支援するため、カウンセリング、教科指導、集団生活への適応指導を学校、家庭、関係機関等と連携しながら行うことを目的とする。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

- 適応指導教室「ステップ・クラブ」の役割について
- 学習指導について
- 子どもたちの帰るべき学校・学級の絆を保つことについて

## 相談・支援等の状況

- 「ステップ・クラブ」は、児童生徒の体力や精神的な発達、学級という集団の中で人間づくりと人間関係の結び方を体得するといった学校で行われる教育活動に適応できるように支えるものである。
- 「引きこもったままよりステップに引き出すこと」・・・様々な事情により、学校へ通うこと、人間関係を築くことに臆病になっている児童生徒をそっと後押ししてあげる「場」である。
- 「ステップ・クラブ」での学習指導は、短時間の指導であるため、基礎・基本の指導を重視する。
- 学級担任、教科担任との心をつなぐため、学級通信を、家庭に持参するように学校にお願いしている。また、登校できていない児童生徒を学校行事や検診などに参加させるなど登校のきっかけづくりを続けていく。

## 《 本事例の留意点 》

- 不登校の生徒に、学級担任が自身の担当教科における作品の制作を通して登校を促し、1日を通して学校で学習できる状況ではないが、登校が可能となったケースがある。学校、学級担任の働きかけ、家庭の理解、本人の意志が重要であり、「**タイミングと周囲の理解が鍵**」となっている。

**Keyword**

「学校との情報共有」「関係機関との連携」「登校支援に向けた相談と支援」

## 《 概要 》

- 11月末現在で本町の不登校児童生徒は、9名となっている。要因は、学習や集団生活への不適應、ネグレクトや虐待等の家庭環境など様々である。特に家庭環境に起因するケースが多くなっており、町の保健福祉課や児童相談所、警察などの関係機関と連携することが増えている。
- 適応指導教室「ハマナスくらぶ」では、学校・家庭・関係機関との連携を密にし、個々のケースに応じた支援を継続している。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

## ○ 学校との情報共有

## ○ 関係機関との連携

○ 登校支援に向けた  
相談と支援

## 相談・支援等の状況

- 相談窓口の周知  
4月初旬に学校を通じて「適応指導教室だより」を配布し、支援内容や通級の手続き、相談窓口などについて保護者や教職員へ周知した。
- 学校からの情報提供を踏まえた指導  
月末の長期欠席報告時に児童生徒の状況や学校の対応について情報共有し、支援方法について共通理解を図った。また、不登校傾向にある児童生徒の状況についても、学校からの相談にしている。
- 相談機関との連携支援  
不登校となる要因は児童生徒により様々であるため、学期末等に職員が学校訪問し、一人一人の状況について詳しく聞き取りを行った。また、ケースによっては保護者と面談を行い、家庭での困り感を把握するとともに、相談機関を紹介するなど、学校と連携して相談機関へつなげてきた。  
〈連携を図っている相談機関〉
  - ・長沼町適応指導教室「ハマナスくらぶ」
  - ・スクールカウンセラー
  - ・フリースクールや医療機関等の紹介
  - ・町保健福祉課等
- 今年度の相談や支援の状況  
今年度、適応指導教室に通級する児童生徒はいないが、保護者や児童生徒の意向を確認し、機会あるごとに通級を勧めてきた。また、早期から関係機関と連携した対応をすることにより、学校へ復帰することができる児童生徒が出てきた。

## 《 本事例の留意点 》

- 学校から定期的な報告を受けるだけでなく、随時不登校児童生徒について**学校との情報共有**を行うことにより、不登校になる恐れのある児童生徒も含め、早期から個々のケースに応じた対応ができた。
- 家庭環境、ネグレクト、虐待等が不登校の要因となるケースが増えてきており、児童相談所等の**関係機関との連携**や家庭支援、社会的援助の立場で対応するなど、児童生徒の自立につながるように、今後も「共有、連携、相談・支援」の視点を大切にして**登校支援に向けた相談と支援**を継続する。

**Keyword**

「外部機関を活用した効果的な学習支援」

《 概要 》

- 中学校第3学年の当該生徒は、友人とのトラブルによって、第2学年の秋頃から不登校になった。現在、高等学校への進学を目指して学習に取り組んでいる。
- 当該生徒が目標としている高校進学に向けて、週1～2回程度公民館で学習支援を行っている。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

○外部機関を活用した効果的な学習支援

- ・ 公民館の利用
- ・ 教育委員会の職員の学習支援
- ・ 対話を通じたコミュニケーション能力の向上
- ・ 本人の意思を尊重し、高等学校進学を目標にした学習支援を中心に行う
- ・ コミュニケーション能力の向上を図るために、文章で会話をを行う。

相談・支援等の状況

- 学校への通学はもとより社会的な自立をねらいとして、必要な基礎学力及びコミュニケーション能力の向上を重視している。
- 教育委員会の職員が、週1～2回程度公民館を利用して国語科・数学科・英語科の学習支援を行っている。
- 公民館の利用の際は、家庭から中学校を経由して教育委員会に連絡を行っている。
- 公民館を利用した際は、出席したものとして扱えるよう学校と確認している。
- 学力については、確実な定着がみられている。
- 国語科や英語科の学習時間を確保することが課題である。
- 学力の向上に伴い、生徒自身の自己肯定感の高まりがみられる。
- 自宅においても学習に取り組むようになり、学習時間が増加している。

《 本事例の留意点 》

- 不登校の原因の一つに基礎学力が十分に身に付いていないことが考えられる。
- 本人の意思を尊重し、目指す進路実現に向けて、関わる大人が支援したり、指導者が積極的に対話を行ったりすることで、当該生徒の他者とのコミュニケーションに関する心理的障壁を下げる事ができた。

**Keyword**

「正しい児童理解」「自己選択活動への支援」「家庭、学校との連携」

## 《 概要 》

- 当該児童は第3学年の冬休み前後から、「男子が嫌」「教室がうるさい」「他の子が係活動をきちんとしない」等の理由で教室へ入らず、校内外を逃げ回るため、相談室や図書室で個別指導を行うことになった。
- 小鳥（野鳥）に詳しく、図鑑の写真や説明を丁寧に書き取ることを好む。漢字に強く興味を持つが、割り算、文章読解などに拒否感を示す、自分は勉強してもわかるようにはならないと決め付けてしまう。
- 継続した通級を実現後、曜日を決めた登校を実現し、徐々に登校回数を増やし、学校復帰を目指す。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

5月

「支援検討会議」  
による支援検討趣味・好みに共感  
し居場所をつくる

6～8月

集団交流を通して  
社会性を伸長する学習に対する劣等  
感を軽減する

9～12月

個人の特性に配慮  
した学習支援登校機会の継続、  
学校への不安軽減

## 相談・支援等の状況

- 当該児童の正しい理解のため、学級担任等と「支援検討会議」を行った。「支援検討会議」では、以下のことが確認された。
  - ・小児心療科を受診した結果、医師から「今、学校を強く勧めるのは学校を敵視させることになるので控えたほうがよい」とアドバイスを受けたこと。
  - ・当該児童は家族の嫌いなところを度々口にするがあること。
  - ・母親には完璧主義的な面があり、学校から褒めることを勧めても娘には褒めるところがないのでできないと話していること。
- 適応指導教室では、午前には教科の学習、午後には制作活動、交流活動を行った。
  - ・当該児童は学習活動には逃避的な態度を示した。漢字だけには興味を示し、漢字しりとりや部首による仲間集め等の活動で学習への参加意識を持たせた。
  - ・午後の活動では、好きな野鳥の話の聞いたり、それらを題材にした絵や小物作り等に取り組みせたりして、適応指導教室での居場所づくりをすすめた。
- 年長者との集団交流に参加させ、自分も大切にされる存在であると気づかせた。
  - ・中学生と教え合いながら絵をかき、小物作りを体験させた。また百人一首、ミニバレーにも積極的に参加するようになり、特に百人一首では自分から中学生を誘うようになった。
- 苦手意識の強い教科では基礎学力を支援し、自ら選ばせた学習で支援を行った。
  - ・計算力の向上で算数への拒否感が軽減されてきた。
  - ・興味のある動植物の説明を視写し、得意の漢字力を生かして図鑑づくりに取り組んだ。
- 家庭、学校と協議、連携し、曜日や時間帯を定めた部分的学校復帰をすすめた。
  - ・校内での支援の他、定期的な通級指導教室、医療機関での訓練を継続中。
  - ・以前は全く拒否していた宿題プリントにも取り組めるようになった。
  - ・授業で使用したテスト類、練習プリントにも適応指導教室で取り組み、担任に提出後採点されたものを確認して満足した表情を見せるようになった。

## 《 本事例の留意点 》

- 自己紹介を極端に嫌がる、食べ物の好き嫌いが激しいなど、こだわりの強さを示す特性を把握するため、**家庭、学校との連携**を図り、**正しい児童理解**が重要である。
- 「好きな学び」「見通しの持てる学び」よう**自己選択活動への支援**を行うことで、自己有用感、自己肯定感を高める。

## 《 概要 》

- 小学校の時から友人関係のトラブルが多く、中学校には部活動を理由に区域外通学をしている。
- 部活動で顧問の指導に不満を持ち、第1学年の6月頃から部活に出なくなった。同時期、学級での友人関係や上級生とのトラブルもあって徐々に登校日数が減り、2学期からはほとんど登校できなくなった。
- 母親は当該生徒の不登校に悩み、市の子ども家庭課の職員、SSWに相談し、第1学年の9月から適応指導教室に通級するようになった。同時期、母親は、学校でのカウンセリングを受けるようになった。
- 第1学年時の当該生徒に対する学校の対応に不満を持ち、第1学年の2月と第2学年の5月に保護者が学校を訪問し不満を訴えた。
- このような状況を受け、学校への信頼を回復し再登校を目的とする、学校・家庭との連携と自己肯定感を高める指導を続けてきた。

## 《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
(中1) 8・9月 ○当該生徒の実態把握と関係者間の連携 ○体験通級	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校、子ども家庭課、適応指導教室で当該生徒の状況を共通理解するとともに、適応指導教室への通級を保護者と当該生徒に勧めた。</li> <li>○ 2週間の体験通級期間を設定し、自己肯定感を高める指導を中心に行った。</li> <li>○ 母親との面談の中で、学校でのカウンセリングを受けるよう勧めた。</li> <li>○ 2週間後、正式に通級することになり、ほぼ休まずに通級するようになった。</li> </ul>
(中1) 10～3月 ○適応指導 ○学校や家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 当該生徒自身が気づいていない能力や良さ、日常の小さな頑張りなどを伝えて自信を持たせるなど、自己肯定感を高める指導を継続して行った。特に、本来持っているリーダー性を発揮できるよう、日常活動や行事での取り組みを工夫して行った。</li> <li>○ 2月の保護者の学校訪問以来、対応を見直し、週1回のペースで担任が適応指導教室を訪問し、当該生徒とコミュニケーションを取るようになるとともに、学校や担任の取り組みについて、指導員から保護者に伝えるようにした。</li> <li>○ 適応指導教室での保護者懇談の内容や保護者の意向等を学校に伝えるなど、連携を継続しながら指導に当たった。</li> </ul>
(中2) 4月～ ○適応指導（学習支援を含む） ○学校や家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 5月にスクールカウンセラーが担任とともに適応指導教室を訪問し、それ以降当該生徒も学校でカウンセリングを受けるようになった。</li> <li>○ 進路を意識させ、学習習慣を身に付けさせる取組を継続して行っている。</li> <li>○ 学校祭の取組に参加できるよう、学校と適応指導教室指導員が協力して指導し、登校できる時間が増え、学校祭にも参加できた。終業式にも参加できるようになった。</li> </ul>

## 《 本事例の留意点 》

- 適応指導教室の指導員が、当該生徒に対する担任の対応を面談等で保護者に伝えることで、学校や担任に対する信頼が得られるようになった。また、週1回を基本とする担任の適応指導教室訪問により、2年生になると、当該生徒の担任への信頼感も深まっており、**学校や家庭との連携**を効果的に進めることができた。
- 適応指導教室では、当該生徒のペースに合わせた指導と**自己肯定感**を高めるための指導を中心に行ってきた。元来、リーダーの素質を持っているため、ほめられることでその素質を更に伸ばすことができた。また、適応指導教室での給食の準備や片づけ、掃除、その他共同作業など、率先して行う場面が見られるようになってきた。後輩の面倒もよく見ている。

【千歳市】

## 心の安定を図った居場所づくりの事例

### Keyword

「家庭との連携や支援」「登校支援」「学校以外での居場所づくり」

### 《概要》

- 当該生徒は、中学校第2学年女子である。第1学年の9月、関東地方から引っ越してきてすぐに胆振東部大地震を経験した。幼少時に身内が東日本大震災を経験していることもあり、地震に対する恐怖心から登校意欲を失い始めた。(幼少期よりモヤモヤ病を抱え、半年に1度、定期的に通院している。日常生活の中で、病気による影響はほぼない。)
- 学校復帰に向けて、家庭・学校と連携し、登校支援を行っている。

### 《相談・支援等の実際》

#### 相談・支援等の視点

##### ○家庭との連携や支援

##### ○学校との連携による登校支援

##### ○適応指導教室での体験活動など学校以外での居場所づくり

#### 相談・支援等の状況

- 家族構成は当該生徒と父、母の3人家族である。母は当初より一貫して本人に寄り添っているが、父は本人の不登校に際し、難色を示していた。
- 担任・適応指導教室指導員・SSWの働きかけにより、現在、父は不登校に理解を示している。
- 適応指導教室の活用は、保護者の意向により、学校への完全復帰を見据えながらの通級とした。第1学年1月より、適応指導教室への通級を開始し、当初は週1日から2日の通級を目指した。
- 担任が当該生徒を放課後学校に招き、個別に理科の実験授業を行う等で学校との関わりを継続的に持つような対応をした。
- 第2学年になる時のクラス替えで第1学年での人間関係を考慮し、仲の良い友人と同じクラスになるように配慮した。(第2学年4月から徐々に登校できるようになる。)
- 担任が本人と保護者の意向を踏まえ、本人が適応指導教室に通級していることをクラスに周知した。
- 7月に行われた学校の宿泊研修にも参加し、現在は週4日程度、学校に登校している。
- 学校の授業への適応や学習支援を目的に、SSWによる週一回程度の一斉授業や「おあしすプロジェクト」(教頭会と連携を図り、教頭や担任が、適応指導教室で2月に週2～4コマ授業を実施)への参加を促した。
- 本人の登校疲れや登校への不安が解消するよう、本人の様子を随時見ていく。(週1日程度、適応指導教室に通級している。)
- 適応指導教室が本人の居場所になるよう、適応指導教室での行事等を積極的に案内し参加することができた(宿泊研修、調理実習、農園活動、図書館活動、中学校との交流活動などに参加)ことにより、心や人間関係が安定し、登校も継続できている。

### 《本事例の留意点》

- 父親に当該生徒の状況を説明し、保護者が当該生徒について理解し強みを見つけ、根気強く関わるなどの登校支援を継続した。
- 適応指導教室など学校以外での居場所づくりにより、心や人間関係の安定につなげることができた。

## 《 概要 》

- 当該生徒は小学校第5学年から不登校傾向が見られ、中学校第1学年ではほとんど登校することができなかった。中学校第2学年に、行事等で登校することができ、12月から適応指導教室に通級しながら、学校へは行事に参加のため登校している。現在中学校第3学年の男子である。家族構成、父、母、本人、弟（小学校第5学年）の4人家族。
- 1、2教科を中心に適応指導教室で学習し、自信を持たせることを主眼として進めた。
- 「登校したり、適応指導教室に来たりすると腹痛がする。」と言うので、あえて、登校や通級についてはふれないようにしている。

## 《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
中2 12月～3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 入級前に通信制の高校に進学することを決めていた。</li> <li>○ 週2回の通級。それ以上は、体調不良になるため控えていた。</li> <li>○ 長い間、授業に参加できなかったため、マンツーマン個別指導を行った。（数学、英語、中学校第1学年のはじめから）</li> <li>○ 中学校に登校する日を学級担任が設定し、当該生徒に伝え、同意を得た。</li> </ul>
中3 4月～ 9月（前期）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 4月に始業式、修学旅行へ向け3日登校した。適応指導教室週2日。</li> <li>○ 5月に修学旅行参加4日、体育祭に向け7日登校した。適応指導教室3日、英語中学校第2学年の範囲に入った。</li> <li>○ 7月頃から適応指導教室週3日、数学の一部は中学校第3学年の範囲に入った。</li> <li>○ 8月下旬から登校以外適応指導教室に通級した。</li> <li>○ 9月から定期テストを学校で受けることを確認した。</li> <li>○ 9月下旬は午前中、適応指導教室、午後から登校（学校祭関係）した。</li> </ul>
中3 10月～12月（後期）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 英語は中学校第2学年の範囲まで完了し、当該生徒の希望で歴史の学習も始める。数学は1月末に中学校第3学年まで完了する見通し。</li> <li>○ 個別の指導と自学自習が併用できるようになった。</li> <li>○ 進学希望先の高校の通信の見学、決定。高校で困らないよう学習を継続している。</li> <li>○ 通級生とコミュニケーションをとる機会も多くなってきた。雑談の中で、自分の考えや感想を言うことも見られるようになった。</li> </ul>

## 《 本事例の留意点 》

- 8月下旬から、適応指導教室にほぼ毎日通級し、継続する力が身に付いた。
- 学級担任を中心に学校と連携をとり、どの場面で登校し、どの場面で通級するかを相談し、当該生徒が**適切な場の選択**をできるようにした。その結果、平日は、家で過ごすことがほとんどなくなった。

**Keyword**

「教育相談」「関係機関連携」「学校との情報共有」

## 《 概要 》

起立性調節障害の診断あり、朝起きられない。第1学年の冬休み明けから体調を崩し、2月に休みが多くなったが、3月は頑張って登校した。第2学年の4月から教室に行けず、本人が自分のスマホで「すぼっとケア」を調べ、行きたいと思った。中学校に入学してからの対人関係の不安やストレスが大きい。

父母と当該生徒の3人家族である。当該生徒は、真面目な性格であり、臨機応変な対応が苦手で、困り感を持っている。

SSWとの連携により、学校と情報を共有し、放課後学習やテストの別室受験体制を整えた。通級をすることで生活リズムを安定させ、部分登校から集団生活への復帰を目指している。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

## ○教育相談

- ・生徒理解と支援
- ・学校との情報共有
- ・SSWとの連携

## ○通級開始

- ・母子面談
- ・SSWとの面談
- ・関係機関との連携

## ○支援から継続

- ・学校訪問
- ・相談支援

## 相談・支援等の状況

- 教育相談の継続
  - ・適応指導教室での個室対応支援と生徒との相談の継続
  - ・中学校との情報共有と支援体制づくり
  - ・SSWによる相談の継続
- 当該生徒の様子
  - ・「勉強」「友人・人間関係」「家庭」「眠れないこと」と、どれも同じくらいの不安感があり、「不登校」であることが大きな不安である。
  - ・学習意欲は高く率先して質問したりする。生活面でも気になることがあれば指導員に声をかけ、相談することができる。
- 困り感の解消に向けた関係機関や医療機関との連携
  - ・医療受診とカウンセリングへの促し
  - ・医療機関とSSWとの連携と母子の理解援助
  - ・適応指導教室での支援と相談活動、学校との情報共有
- 学校復帰に向けた支援体制づくり
  - ・部分登校と適応指導教室の併用
  - ・担任との連携（漸次的不登校支援の提案）
  - ・適応指導教室、学校、SSWによる相談支援の継続

## 《 本事例の留意点 》

- 当該生徒の特性や困り感を各**関係機関が連携**して理解するとともに、適応指導教室にSSWが連携に加わり、アセスメントに基づいた支援プランを提案した。
- 適応指導教室と部分登校の併用を続けながら**学校との情報共有**を図り、担任や指導員に相談しながら考えることの有効性を当該生徒が理解した。
- 今後の課題としては、学校への復帰に向けた取組、相互連携と他機関連携の振り返り等、適応指導教室と学校との共通理解のあり方、システムづくりであり、保護者を交えたケース会議の提案などを行う必要がある。

## 《 概要 》

- 小学校第5学年の頃から、登校はするものの、学習に対する不安で教室に入ることができなかった。
- 中学校へ進学後、学習についていけず、不登校になり、家でゲームをしたり、動画配信を見たりして過ごし、生活リズムが乱れていた。
- 母親は、当該生徒に対する困り感が強く、中学校第1学年の9月中旬から登校支援室への通級を始めたことをきっかけに、登校支援室では、当該生徒に通級を継続するとともに、生活リズムの改善を求めた。
- 算数科の加減乗除が定着していなかったことから、個別指導を始め、小学校の学習内容から継続して取り組ませた。
- 冬休みに入り、保護者と学級担任と登校支援室の指導員が、現状と課題を確認し、今後について話し合う中で、3学期から週3日の登校を目指し、それぞれの立場で支援することを確認した。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

- 母子と通級相談
- 生活改善
- 学級での友人関係

- 個別指導
- 基礎的・基本的な学習内容の指導

- 保護者・学級担任・指導員による3者面談

- 目標設定
- スモールステップでの学校復帰

## 相談・支援等の状況

- 当該生徒と母親が登校支援室に来室し、不登校に至った経緯や現在の生活の様子、今後への思いなどを確認し、翌日から通級を始めた。
- 登校支援室の指導員は、当該生徒と保護者に対し、ゲームに没頭して昼夜逆転になっている生活リズムの改善を求めた。
- 当該生徒は学習意欲がなく、集中力が途切れやすく、国語科・数学科の基礎的・基本的な学習内容が定着していなかった。
- 文化祭には参加し、会場で見学しているとき、学級の友達と楽しそうに話をしていた。
- 登校支援室の通級時刻が安定せず、ゲームに没頭していたため、眠そうな状態が続いた。学習に集中できず、途中で寝ることもあった。
- 当該生徒に対する個別指導を行うため、「ふらっとルーム」への通級を勧めた。
- 算数科や視写の学習に継続的に取り組み、中学校第1学年の一部の学習内容まで進められたことにより、当該生徒も自信を持つことができた。
- 冬休み中に、保護者、学級担任、指導員で面談を実施した。
- 学級担任は、当該生徒が登校した場合の具体的な対応を示した。
- 指導員は、学習状況と「ゲーム脳」の心配について、母親に伝えた。
- 母親は、兄の協力を得て、週3回程度の登校を促すことを約束した。
- 当該生徒は、始業式に登校し、保健体育科と数学科のある日（週3日）に登校することを、学級担任と約束した。
- 当該生徒は、遅刻早退や保健室登校をすることがあったものの、学級担任との約束を守り、継続して登校した。
- 当該生徒は、2月中旬からほぼ毎日登校して、教室で学習し、給食を食べ、テストも受けられるようになった。

## 《 本事例の留意点 》

- 学級担任と指導員は、当該生徒に登校させたいという母親の願いを受け止め、学習や生活の様子を共有し、登校までのスモールステップでの目標設定を行い、指導の方向性を確認した。
- 学級担任は、学級においてかけがえのない存在であることを当該生徒に伝え、指導員は、生活リズム改善の必要性について指導した。
- 家庭・学校・登校支援室が連携することにより、保護者・学級担任・指導員が、当該生徒の状況を共有し、目標に向けてそれぞれの立場で関わり、連携することの必要性を強く認識した。

## 《 概要 》

- 当該生徒は、現在中学校第3学年だが、中学校第2学年の3学期に同じ学級の友達とのトラブルがあり、その後、不登校となった。また、文化系の部活動に所属していたが、部活動の友達とのトラブルもあり、そのことも不登校の原因の一つとなっていた。
- 学校では、教室に入れないが、部活動の練習には行きたいと言っているため、午前中は適応指導教室で過ごし、放課後に部活動の練習ができるよう、学校と連携を図った。

## 《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
○部活動の活用 ※部活動の練習への参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校での学びの支援               <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校と連携して、部活動の練習への参加と居場所の確認を行った。</li> <li>・令和元年6月、教室には入ることができないが、部活動が大好きなので部活動の練習に参加したいという希望があった。</li> <li>・午前中は適応指導教室に通級し、午後は学校に登校して6時間目を別室で過ごし、部活動に参加できるよう、学校と連携を図った。</li> <li>・その結果、10月の発表会まで、登校できる日が増えていった。</li> </ul> </li> </ul>
○学校行事の活用 ※体育大会、学校祭などへの参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校における学びの支援               <ul style="list-style-type: none"> <li>・適応指導教室と学校が連携して、学校行事の情報交流と事前準備の確認を行った。</li> <li>・準備がなくても学校行事への参加ができるよう学校に対応してもらい、主な学校行事に参加できる環境を整えた。特に、部活動の発表で活躍できる学校行事への参加を目標にした。</li> <li>・その結果、当該生徒は、学校行事の事前練習にも参加できるようになった。さらに、部活動が終わった後も、学校行事を中心に登校できるようになった。</li> </ul> </li> </ul>
○進学に向けた学習支援 ※中間・期末テストへの参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校外における学びの支援               <ul style="list-style-type: none"> <li>・当該生徒の好きな部活動を設置している高等学校への進学に向けて、適応指導教室において学習支援をした。また、中間及び期末テストを受けることを勧め、学校において、別室でテストを受けられる体制を整えた。</li> <li>・その結果、進学に向けて、当該生徒の学ぶ意欲を高めることができた。</li> </ul> </li> </ul>

## 《 本事例の留意点 》

- 高等学校進学に向け、中間及び期末テストを受けることを目標にして、学習意欲を高めた。
- 「学校と適応指導教室の両立ができる環境づくり」に努め、当該生徒に、登校・通級の選択をさせ、登校のチャンスを広げた。
- 進学に向けて、当該生徒の希望を中心に、学校と積極的に情報交流を進めた。

## 《 概要 》

小学校低学年時には、周囲から行動が遅いとたびたび指摘を受け、自信が持てなくなったが、欠席することはなく登校した。小学校卒業後、札幌市内の中学校に入学し、1学期は良好に学校生活を送るが、友人関係での悩みや学習面での落ち込みで登校できなくなった。その後、適応指導教室への通室や週1回のカウンセリングを続けるが登校には至らなかった。

そのため、第2学年進級時に祖父母のいる室蘭市の中学校に転校し、当初は登校していた。職業体験の発表時に、緊張から言葉を発することができなくなった。その後、教室に入れなくなり、別室で学習を行った。11月から訪問アドバイザーによる登校支援を開始し、3学期の教室復帰を目指したが、3学期始業式後の1週間で登校できなくなった。2月から適応指導教室へ通室を始め、他の通室生との交流や体験学習を通して、コミュニケーション能力の向上、自己肯定感を持たせるとともに、向上心を育む働きかけをしてきた。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

中学校第2学年11月

- 早期対応
- ・ 学校との連携

中学校第3学年

- 随時の教育相談
- ・ 学級担任との定期的な面談
- ・ 保護者との教育相談
- 学習活動の評価
- ・ 学校との共通理解

## 相談・支援等の状況

- 学校と保護者との信頼関係の構築  
(定期、随時の学校訪問及び保護者への連絡の徹底)
- コミュニケーション能力の向上を図る働きかけ
- 学級における支持的風土の醸成(学級担任への協力依頼)
- 通室日を出席扱い、第2学年の欠席日数 29日
- 学力向上を目指した自主的な学習を中心とした取組
- 週2回の通室児童生徒との交流を図る体育の学習の実施
- 人々のかかわりを重視した体験活動の計画及び実施  
(スポーツ体験・畑作業・職業体験・ものづくり体験等)
- 評価物の提出及び定期テストの自校での受験(評価・評定への反映)
- 学級担任の空き時間に登校し、週1回の学級担任との面談
- 通室児童生徒とのかかわりの中でコミュニケーション能力を高める活動の取組  
(昼休みの交流・新聞記事の発表、朝の会・帰りの会の司会進行等)
- 毎月の欠席及び学習状況等の学校への報告  
【通室日は出席扱い、第3学年の欠席日数 8日(11月末現在)】
- 訪問アドバイザーによる随時の学校訪問
- 保護者との教育相談の実施

## 《 本事例の留意点 》

- 不登校の早い段階で登校支援のかかわりをもつことにより、抵抗なく適応指導教室への通室へつなげることができた。また、通室日数が在籍校で出席日数として扱われるため、継続して通室する意欲とつなげることができた。
- 自主的な学習の取組の中で、評価につながる提出物や作品づくりの取組、定期テスト受験への働きかけにより、適応指導教室での学習活動が一定程度評価されたことは、当該生徒の自信につながり、2学期からの学校復帰への意欲を高めることができた。

**Keyword**

「居場所の確保」「学校との連携」

## 《 概要 》

小学校の頃は、不登校傾向はなく、中学校入学当初も、部活動（剣道部）に入部し、学校生活においても自由闊達に活動していた。

しかし、6月頃から偏頭痛による体調不良を理由に欠席が多くなり、月ごとに欠席日数が増えていった。登校したときは教室で授業を受けていたが、次第に別室登校となった。また、人の目を避けるため、遅刻・早退することが多くなった。当該生徒からは、学習に対する意欲は感じられた。第1学年の12月から適応指導教室への通級がはじまった。保護者は不登校に関する学校の取組に理解を示し、協力的であった。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

中学校第2学年

- 居場所の確保
- 学校との連携

中学校第3学年

- 学校との連携
- ・学校行事への参加
- ・登校刺激

8月～12月

- 継続的な通級
- 学校との連携
- ・学校行事への参加
- ・進路選択

## 相談・支援等の状況

- 第1学年の時は、自宅から適応指導教室の所在地が少し離れたところで、保護者の送迎がなければ通級できないこともあり、ひきこもりがちであった。
- 第2学年になると適応指導教室の所在地が変わり、自宅から歩いて行けることもあり、前年度まで週3日だった適応指導教室は、休日以外の毎日開設することとなった。しかし、第2学年になっても学校への登校はできず、4月当初から通級申請があり、5月から通級が始まった。
- 5月中旬から学校へ登校を始めた。
- 週1度のスクールカウンセラーとの面談により、当該生徒は、学校への登校意欲が感じられた。
- 9月の宿泊研修に参加後、不定期に学校への通学と適応指導教室への通級が続いた。
- 第2学年の3学期に、家庭の都合で隣接する市町村に転居した。
- 母親の献身的なサポートの下、居住地から通級を続けた。精神的に安定せず、この頃から心療内科で薬の処方も受けていた。
- 第3学年では、ほぼ毎日通級し、週1回のスクールカウンセラーとの面談も欠かさず、学校へ登校した。
- 2教科だけではあるが、1学期の定期テストを教室で受けることができた。
- 見学旅行へ参加するための事前研修などで学校へ登校する日が続き、見学旅行にも参加し、教室で旅行の出来事を数多く語ってくれた。
- 学校祭にも参加し、合唱コンクールにも参加することができ、クラスメイトとも感動を共有することができた。
- 学級担任と三者面談を行い、進路についての話し合いを進めるとともに、親子で通信制高校の学校説明会に参加し、進学への意識付けが図られた。

## 《 本事例の留意点 》

- 保護者と学校、適応指導教室との継続した連携により、継続通級に向けた働きかけができた。
- 他の生徒との交流を通し、通級の楽しさを感じることができた。
- スクールカウンセラーとの面談が学校へ登校する転機となっており、小学校以来の親友との交流ができる場が学校となっている。
- 母親の献身的なサポートがあり、母親との信頼関係が見られる。

**Keyword**

「他者との交流」「自信の回復」「進路の目標」

## 《 概要 》

生徒は、真面目な性格で、学習意欲が高く、第1学年の時の成績は上位であった。第1学年の秋頃から起きられない日が増えたことから、医療機関を受診したところ、医師から起立性調節障がい診断を受けた。

第2学年に進級後、部活動の人間関係に悩み、登校意欲が低下し、欠席が多くなった。第3学年に進級後も欠席が継続したため、一時的に環境を変え、継続して通える場として、旭川市適応指導教室に通室することとなった。入室後、教育相談において本生徒の将来の夢や悩みを聞くことを重視した対応を行うとともに、他の通室生との交流や学習及び体験活動を通して自己肯定感の育成に努め、登校を再開することができた。

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

## ○他者との交流

学校外での学びの支援

- ・教育相談
- ・実態把握

## ○自信の回復

学校外での支援

- ・心理的な安定
- ・体験活動への適応

## ○進路の目標

学校での学びの支援

- ・学校復帰への支援
- ・進路の目標設定

## 相談・支援等の状況

- 生徒は、入室相談の際、「人数が多いのは苦手。人に会いたくない。」と話し、個別で指導を受けることを希望した。
- 当該生徒の支援の方向性として、心理的な安定を図り、他者との関わりを増やすことを目的に、スタッフとの教育相談の時間を大切に、生徒の心理的な安定を図りつつ、安心して話ができる環境づくりに努めた。
- 当該生徒の希望により、集団での活動に参加したところ、参加後すぐに「気持ち悪くなってきた。吐き気がしてきた。」と訴えたため、活動から離れることがあった。
- 当該生徒は、集団の活動に参加することはできなかったが、少人数であれば、学習することや活動を楽しむことができるようになってきた。
- 当該生徒は、少しずつ他の通室生と協力しながらボランティア活動などに参加することができるようになった。また、スタッフや他の通室生と将来の夢や卒業後の進路の目標について話すことができるようになった。
- 当該生徒は、適応指導教室の学習及び体験活動を通して、達成感を味わい、自信が持てるようになり、「2学期からは登校し、学校祭に参加したい。」と話すようになった。適応指導教室と学校で連携を図り、学校復帰に向けて支援を行った。
- 当該生徒は、別室登校をしており、学校での交友関係も広がりつつある。

## 《 本事例の留意点 》

## ○取組の特色

- ・生徒に対し、適応指導教室における体験活動の参加について、無理のない範囲で参加を促すとともに、他の通室生と交流ができるよう働きかけに努めた。
- ・教育相談では、生徒の将来の夢を聞くことを重視し、進路の実現に向け、自覚を促すよう努めた。また、スタッフから生徒に対し、自ら計画して学習することの大切さ伝えるとともに、学習支援の充実を図ることにより、自己肯定感の育成に努めた。

## ○生徒の変容

- ・教育相談において、当該生徒の将来の夢やその実現に向けた話を丁寧に聞くことにより、自ら主体的に考え、進路の目標を立てることができた。
- ・当該生徒は、他の通室生から「一緒に活動しよう」などの働き掛けを好意的に受け止められるようになった。登校再開後は、「別室登校から少しずつ教室へ入る機会を増やしたい。」とこれからの決意を語るできるようになった。

**Keyword**

「学習内容の再考」「場の設定」「学校との連携」

## 《 概要 》

- 不登校児童生徒の状況  
小学校入学当初から学習の場や集団になじめず、第2学年の5月の連休以降、学校へ行けなくなった。発達診断を受け、自閉症スペクトラムの傾向があると指摘された。学校も登校に向けて保護者と連携を図ったが改善しなかった。第3学年に進級後、母親が同行して、適応指導教室への通室が始まった。現在は週に2日、個別学習と体育（9時～11時半）に参加することが定着しつつあり、母親から離れて学習や運動に自信をもって取り組むようになった。
- 支援の目標や方向性  
当該生徒が自信を持てる取組を通して、母親から離れ1人で学習や運動ができるようになる。

## 《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
<p>○ <b>学習内容の再考</b> 学年相応の内容にこだわらず、書字、読字、数を中心に取り組む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 通室当初は、学校から渡された学年相応のプリントをやらなければならないという意識が強く、プリントに5～6分取り組むだけで、貧乏ゆすりやチック症状が頻繁に見られた。</li> <li>○ なぞり書きや数唱が満足にできないという実態から、学習内容を、書字読字、数を中心に取り組むように変えた。</li> <li>○ 第5学年になり、1時間程度の課題に取り組むことができるようになった。</li> </ul>
<p>○ <b>母親から離れて過ごせる場の設定</b> 学習や運動の場の工夫をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 通室当初は、母親がいないと適応指導教室や体育の授業に参加できず、会話も母親を介さなければできない状態だった。</li> <li>○ 施設内の別の階に学習室を設け、母親から離れた場で課題に取り組むようにした。また、体育がある日は、母親が送り迎えだけするようにした。</li> <li>○ 第4学年の11月から母親がいなくても教室で学習できるようになった。自信がついたため、周囲とのかかわりが多く見られるようになった。</li> </ul>
<p>○ <b>学校との連携</b> 学級担任、適応指導教室相互の連携が、保護者の信頼感を生む</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校復帰に向けて、ケース会議や保護者との懇談、登校刺激などの支援を試みたが、登校には至らなかった。</li> <li>○ 特別支援学級への在籍変更により、学級担任からの働きかけがきめ細かになり、家庭との意思疎通が図られるようになった。</li> <li>○ 当該児童が学校からの宿題を適応指導教室に提出し、指導員とともに学校へ届けに行くという習慣ができ、少しずつ登校できるようになった。</li> </ul>

## 《 本事例の留意点 》

- 母子分離が不十分で、常に母親について回るか、一人でゲームやタブレットを操作する生活が続いていたが、自分のペースで週に2回の通室を継続することにより一人で行動できるようになってきた。
- 学習障害的な傾向から、学習内容を書字、読字、数の3点に絞りスモールステップを踏んで反復練習を継続して取り組むことにより、自信をもって取り組む姿が見えてきた。
- 3世代同居で祖父母からの登校刺激が強く、両親の悩みでもあったが、児童の成長や変化を家族が実感することにより、児童のペースに合わせた通室を見守るといった雰囲気生まれるようになった。

## 《 概要 》

- 中学校第3学年女子 1年欠席122日 2年欠席116日 3年欠席60日（11月末現在）
- 体調不良で小学校第6学年の3学期あたりから休みがちになった（週に1、2回程度）
- 当該生徒からの要望で病院を受診し、「起立性調節障害」と診断された（中学校第1学年4月）
- 朝なかなか起きることが出来ないこと、自分に抑うつ的傾向があることを自覚している。
- 現在、心療内科に3か月に1度の割合で通院、漢方薬を処方されている。
- 学習面での能力も高く、意欲的にスキー、水泳、ピアノ、書道に取り組むなど多才である。
- 支援の目標や方向性：「基本的生活習慣の改善」「基礎学力の定着」「豊かな情操・社会性の育成」

## 《 相談・支援等の実際 》

## 相談・支援等の視点

## ○主体性の尊重

- ①学校での学びの支援
  - ・学校との情報共有
  - ・関係機関との連携
- ②学校外での学びの支援
  - ・基本的生活習慣の改善
  - ・自主的時間割の作成
  - ・学習サポート

## ○心の居場所づくり

- ①学校での学びの支援
  - ・学校復帰に向けた支援
  - ・登校時の受入態勢
- ②学校外での学びの支援
  - ・相談活動
  - ・体験活動

## 相談・支援等の状況

- 母親は「朝、起きられない状況を改善し、規則正しい生活を習慣化させたい」との意向を持っている。ただ、強制的な指導はしていない。
- 学校も規則正しい生活のリズムづくりを課題の一つとして捉えている。
- 当該生徒も朝起きられない状況を改善し、規則正しい生活リズムを確立する必要性を認識している。
- 通室の状況については、1か月ごとに当該中学校に報告している。
- 適応指導教室で取り組む学習や体験活動等の内容は指導員と相談しながら当該生徒が決めている。
- 学習については教科書やワークブックを活用しての自学自習を基本に、指導員が当該生徒と学習内容を共有し質問に答えるなどしてサポートしている。
- 当該生徒は必要に応じて登校することがあることから、登校時の受入態勢を含め学校体制を見直す必要がある。
- 当該生徒の悩みや思いを受け止め、誠実で肯定的な関わり方を心掛けるとともに、当該生徒が夢を語り、目的意識をもって生活出来るよう努めている。
- 憩いや会話が楽しめる軽スポーツやゲーム、パズルなど多様な体験活動等の取組を交え、人と関わっていく力の育成や「明日も教室に来たいな」と思わせるように努めている。

## 《 本事例の留意点 》

- 生徒は学習面での能力も高く、自分自身の課題を自覚出来るなど自己理解も進んでいる。**主体性を尊重**した指導、生徒個々の実態に即した教育相談や学習支援、多様な体験活動等の取組は、まだ登校意欲にまではつながっていないが、適応指導教室では意欲的な取組が見られるなど、生徒の生活意欲を高め、「学びに向かう力」につながっている。高校進学に対しては前向きで、現在、札幌の高校を受験し、その結果を待っている
- **心の居場所づくり**は心理的な安定をもたらし、自分に対する信頼や自信が生まれ、その自己肯定感や自己有用感が学ぶ意欲を高め、学ぶ力を伸ばし、心と体を元気にしている